



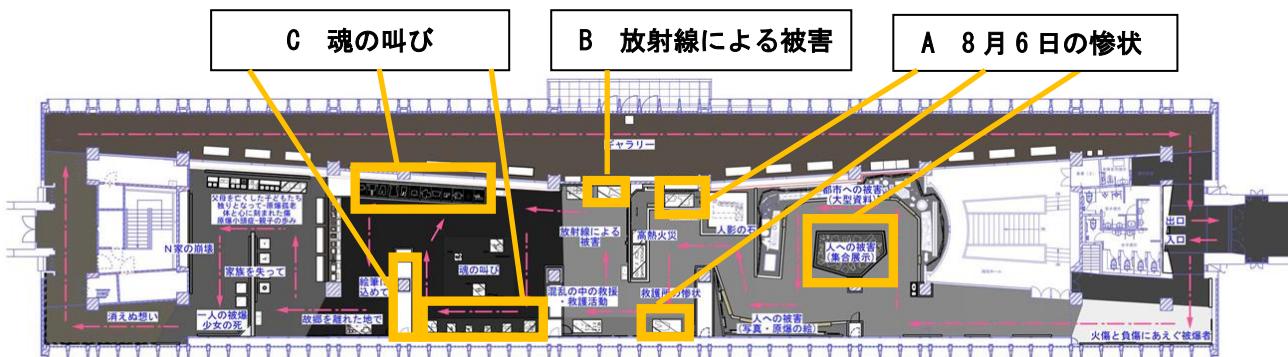
本館の展示資料を入替

本館常設展示について、展示による被爆資料等の劣化を防ぐとともに収蔵資料を公開するため、一部の被爆資料等は概ね1年ごと、原爆の絵の原画は概ね半年ごとに入替を行っています。

今回の入替は、平成31年(2019年)4月25日の本館リニューアルオープン以来、被爆資料等は2回目、原爆の絵の原画は5回目の入替となります。

1 入替の概要（資料名等については別紙参照）

	コーナー名称	資料区分	展示点数と内容
A	「8月6日の惨状」	実物資料	41点 25人 建物疎開作業に動員された生徒たちの衣服や靴、黒い雨を浴びた衣服、救護所で亡くなった人の衣服など
B	「放射線による被害」	実物資料	2点 2人 放射線の影響による症状が現れた人たちの衣服
C	「魂の叫び」	実物資料	27点 17人 原爆で命を失ったさまざまな年代の人たちの衣服、腕時計など
	原爆の絵 原画	6点 遺体の火葬や瓦の上に置かれた遺骨など死者への振る舞いを描いた絵	



2 入替資料の展示期間

令和4年(2022年)3月7日(月)～令和5年(2023年)2月中旬まで概ね1年間

* 「魂の叫び」のコーナーの原爆の絵の原画は8月ごろまで概ね半年間





「魂の叫び」コーナーの入替資料の中から

3111-0012



手袋

爆心地から 800m 八丁堀 浅野純以寄贈

崇徳中学校1年生の浅野綜智さん(当時12歳)は、八丁堀の建物疎開作業現場で被爆しました。顔や手足に大火傷を負い、翌日、捜しに来た親戚の人に発見されました。救護にあたっていた軍医の手当を受け、叔母の家に連れ帰られましたが、その日の夜遅く息を引き取りました。8月14日の朝、愛媛県大三島の実家から父親と祖母が駆けつけた時は、既に遺骨となっていました。

この手袋は、被爆時に綜智さんが身に着けていたものです。

3101-0111



ボロボロになったブラウス

爆心地から 1,000m 雜魚場町 清水廣一寄贈

清水純子さん(当時20歳)は勤労奉仕中に建物疎開作業現場で被爆し、全身に火傷を負いながら自宅にたどり着きました。父と弟が担架に乗せ、病院の応急手当を受けた後、救護所となっていた学校へ運びましたが、翌7日の早朝に亡くなりました。